

【文献紹介】

明治大学史資料センター編『尾佐竹猛研究』

日本経済評論社，2007年10月刊

A5版，369頁，4500円（税別）

落 合 弘 樹

本書は明治法律学校を卒業し、大審院判事、歴史学者、さらには明治大学法学部教授・初代文科専門部長として、多方面に大きな足跡を残した尾佐竹猛の総合研究である。以下、章の順を追って与えられた紙数の範囲内で内容を紹介していきたい。

「序章 尾佐竹史学の成立」（渡辺隆喜）は、まず明治大学に固有な学問的傾向、または知的伝統を表現する「駿台学」を体现する人物として尾佐竹猛が位置づけられ、研究の意義が述べられる。次に、尾佐竹による研究の展開は憲政史→文化史→維新史という順に深化していったとする。そして、フランス法的な明治大学の建学理念と大正デモクラシーという時代背景のもとで、平民の政治的成長を軸に近代史を語るという学問的課題を尾佐竹は打ち立てたとし、陪審制成立に積極的な彼の立場との連関が指摘される。また、実証的側面のみならず、社会変動を前提とした把握は戦後歴史学と結びつく部分も多いとし、単なる政権移行や政治闘争のみならず、庶民の政治参加の基本である地方自治を根幹に立憲国家の成立を捉える視覚の重要性が述べられる。

「第1章 司法官としての履歴と時事法律論」（村上一博）は、まず司法官としての尾佐竹の履歴が検討され、要職から遠ざけた鈴木喜三郎の存在、逆に彼を引き立て、のちには学長として明治大学にも深く関与する横田秀雄との関係が対比的に述べられる。つぎに、尾佐竹が新島区裁判所判事を兼務していた時期に著された『海南法権史』・『海南流刑史』・『海南風俗史』からなる海南叢書三部作の成立過程が検討される。西洋から移植された法制を浸透させることの困難さを、職務を通じて痛感した尾佐竹は、民衆の「生ける法」の把

握が重要だと認識し、それは後年の研究にもつながっていったとしている。また、尾佐竹は西洋法制が形式面で摂取されつつも国民的理解が軽視された結果として生じた、民衆の法観念とのギャップを克服する解決手段として、陪審制度および普通選挙の必要性を強調し、「民衆の法律化」・「法律の民衆化」を持論としていたことが論じられる。

「第2章 『裁判事件史』の開拓者——裁判と事件と歴史——」（山泉進）は、尾佐竹の明治維新史、明治文化史、明治憲政史という分野からやや離れた、「裁判事件史」に焦点を据えている。一般的な事件史が「事件」に中心を置くのに対し、尾佐竹は「裁判」によって事実が認定された「出来事」として「事件」を捉えるが、それは明治法制史に対する強い関心につながっており、「裁判事件史」は法制史研究と一般の歴史研究をつなぐ学際的方法による学問領域と位置づけられる。方法論は史料にもとづく実証的なもので、「面白い物語」や捜査機関の手腕を描く「探偵小説」と異なっており、一方で公的史料のみならず、権威化されていない市井の事実をも積極的に取り入れているとする。たとえば『賭博と拘模の研究』も歴史学の「民衆化」という側面があり、尾佐竹の研究はやはりデモクラシーの方向を向いていたとする。続いて、陪審制との連関で横村事件および広沢参議暗殺事件に際して設けられた「参座」について研究が加えられたこと、大津事件の研究を通じて司法権の独立や人権蹂躪への問いかけがなされたと論じられる。

「第3章 尾佐竹猛の賭博史研究——司法官・歴史家としての尾佐竹猛——」（秋谷紀男）は、旧刑法（1882年）や賭博犯処分規則（1884年）の施行など賭博の取り締まりが法的整備されつつ

も、賭博行為は後をたたなかった状況が述べられ、こうした背景のもとで判事として尾佐竹が賭博と掏摸の研究をすすめたことが説明される。そして、尾佐竹も資料提供を行った宮武外骨『賭博史』との対比で、賭博の手口や国民性に加えて社会的影響にも言及していることや、実際に業者から加工賭け具を入手するなど実証主義的な面が発揮されていることが指摘される。

「第4章 民権結社の成立と地方民会論」(渡辺隆喜)は、第1章でも渡辺氏が論じたように、尾佐竹が立憲議会形成の基礎として明治5、6年から起こる地方民会に注目していたことを指摘し、民権結社が明治6年頃から結成され明治14～15年にピークを迎えることが示されたうえで、立志社一愛国社の士族的民権路線に対して在地の結社が生成される状況が、学校や書籍展覧所、新聞従覧所、地域産業団体、地租改正反対運動および区戸長会民選化運動からの展開など、実例をもとに論じられる。さらに北洲社など民間主導の法律結社の重要性が論じられ、民選議院設立建白に先立って地方議会論が国会を視野に入れつつ主張されていたとする。そして、小田県の例を中心に地方官会議が開かれた明治8年当時の地方民会論が包括的に述べられ、農村からの地域的民権運動の展開が検証されている。

「第5章 明治文化研究会をつらぬく駿台学の系譜」(長沼秀明)は、まず、関東大震災後に吉野作造を中心に設立された明治文化研究会の役割が述べられ、さらに会の雰囲気に参加者の証言などをもとに考察される。そうしたなかで、吉野を引き継いだ尾佐竹が、石井研堂など「町学者」から「官僚臭」を嫌われつつも、田中惣五郎など「左翼」を受け入れるなど幅の広さを発揮したと論じられ、会の好事家的な面も庶民文化にも焦点をあてた史料蒐集であり、憲政史にみられる反権力的、自由主義的学風は、鈴木安蔵を介して日本国憲法制定につながっていったとする。

「第6章 尾佐竹猛における『歴史と文学』の位相」(吉田悦志)は、森鷗外が尾佐竹から史料提供を受けたことを指摘したうえで、「歴史其儘と歴史離れ」という鷗外の論をうけ、新聞記事の史実誤記を契機として、作家子母澤寛の誕生における尾佐竹の役割が指摘される。また、「歴史其儘」の歴史学者である尾佐竹が、時代考証を欠いた報道の誤謬には辛辣であっても、「歴史離れ」した小説家による歴史文学に対する観方は寛容で、融通無碍な面があったとしている。

「第7章 近代史の中の郷土」(鈴木秀幸)は、加賀藩下級武士である尾佐竹の家系と藩の教育事情、維新後に教員を経て羽咋地域の官吏となった父の保の軌跡、郷里の地誌である『志賀瑣羅誌』、加能越の人々の特徴と尾佐竹の性格、尾佐竹の郷土意識および加能越郷友会への関与が述べられている。

「第8章 アンビヴァレンスの人」(山岸智子)は、曾孫という血縁の視点から、「官僚臭」を指摘された尾佐竹の権威主義的な面と、権威に距離を置く面の両義性を指摘し、家族や親戚との関係、二度にわたる戦災が尾佐竹に与えた打撃、日常生活の様子などが描かれている。

「第9章 書誌調査からみた尾佐竹猛——明治大学での事蹟を中心に——」(飯澤文夫)は、同時代の報道における尾佐竹への評価、学内雑誌などから追究した明治大学および関連団体、学内組織における役割、年譜や著作目録の編纂状況、辞書・事典類での扱いが記されている。

非常に雑駁な紹介となり、重要な論点を数多く割愛したが、本書は多様な学問領域から精力的に尾佐竹猛が検討されており、彼の学問的世界はもちろん、官学アカデミズム中心とは違った史学史、さらには大正デモクラシー期の文化などを理解するうえでも必読書といえよう。本書の刊行を機に、「駿台学」が一層の拡大・拡充をみるであろうと強く期待している。